鷲ノ木水門付近三川合流点

トンボ池、できた！

白根市HOPE（ホープ）計画 水辺プロジェクト部会、自然と共生を目指して…

都市圏にありながら、意外なほどたくさんの生物が住み、専門家からその自然度の高さが指摘される三川合流点。ここに、市のまちづくりを進める白根市地域住宅計画（HOPE計画）水辺プロジェクト部会の委員（市民五人）が住民に呼び掛け、トンボをはじめとする生物たちの憩いの池を造りました。小さな手作りの池でも、生物にとってはたまらないオアシス。自然をいたわる人たちの小さなまちづくりが始まりました。

トンボ池は、三川合流点に生息する鳥や昆虫たちのための池。トンボが卵を産みつけたり、ゲンゴロウなどの水生昆虫が生息したり、鳥が水浴びをしたりえさをとったりできるようにするのが狙い。深さ三十センチ、最大半径三メートルほどのだ円形で、信濃川左岸、鷲ノ木水門から百メートルほど下流に造られました。

もともと、信濃川、中ノ口川、大通川が合流するこの一帯は、昔から桜の名所、ヘラブナ釣り場として自然に親しめる貴重な場所でした。一時は信濃川と大通川の間に、その広い敷地を生かして野球場建設の話も持ち上がりましたが、計画は立ち消え、現在はススキやオギなどが伸び放題の原っぱとなっています。三つの川が合流するという珍しい地理的条件と相まって未開発も功を奏し、近郊では珍しく鳥、両生類、は虫類、昆虫の宝庫として残っています。

市では一昨年、白根の良さを生かしたまちづくりを進めるHOPE計画を策定しましたが、その推進部門の一つ、水辺プロジェクト部会が「ぜひこの素晴らしい自然を白根の誇りとして守っていきたい」と発案。専門家の知恵を借りながら具体的な活動に入りました。その第一弾として十月十日、委員たちが住民に呼び掛け、「三川合流点自然観察会&大芋煮大会」を開催。親子連れなど約四十人が参加し、付近の自然を見て回った後、このトンボ池を製作。秋晴れの下、シャベルを手にして掘ること一時間、生物たちの憩いの場を造り上げました。

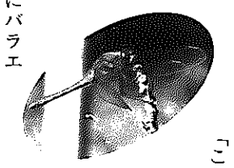
池が掘られてから一週間後、プロジェクト委員の高橋裕雄さん（大通一）とトンボ池を訪れてみました。最初は半径三メートルほどだった池も、数日来の雨の水とあちこちの水たまりの水とが流れ込み、五メートルほどに広がっていました。茶色く濁っていた水も泥が落ち着き、早くもゲンゴロウが泳ぐ姿が確認できました。

「来年はきっとアカネ、イトトンボなど合わせて十～十五種類のトンボがやって来ますよ」と高橋さん。「トンボ池はここだけでなく、もっとあちこちに増やしていきたいと思っています。ここはたくさんの貴重種の植物、昆虫、小鳥のほか、ウサギなどのほ乳類も確認されています。いずれはいろんな生き物の宝庫にしていきたい」。目を輝かせる高橋さんの前で、気の早いアキアカネが数尾、ちょんちょんと尾を水面に付けながら卵を産みつけていました。

翌日、自然観察家として全国に名を知られる佐々木洋さん（東京都在住）が三川合流点を訪れました。佐々木さんはプロナチュラリストの肩書きを持ち、自然をテーマにテレビなどで活躍する傍ら、動物に関する本も数多く出版しています。佐々木さんは言います。

「都会では河原が全部アシ原だったりして単種のケースが多いんですが、ここは潅（かん）木あり池ありで実にバラエティーに富んでいる。キジを見かけましたけど、キジは隠れる場所がないと住めない。そういう動物も安心して暮らしている安全な環境です。この自然を生かした整備をするならトンボ池は良いアイデア。バードバス（鳥のふろ）になるし、ほ乳類の水飲み場にもなる。もうヒメゲンゴロウなんかも生息している。こういうふうに、下手に大規模な開発をしなくても、生物の視点で手を加えてあげればいいんです。

例えばここにハンの木がありますけど、もっといっぱいあれば、ゼフィルスというエメラルドグリーンのチョウが見られるようになるかもしれません。そういった呼びたい生物を決めてそれに合わせて環境づくりをするのも一つの手。自然の歯車を壊さないようにしながら上手に手当をしてあげる工夫、そしてここに住む人たちが『合流点っていいなあ』と思う心が必要ですね」。佐々木さんは力を込めました。



この日は新潟の水辺を考える会の五十嵐寛さんも同行。合流点の自然と市民の関わり方をアドバイスしてくれました。

「ここは本当にいい場所です。いろんな生物を見られるフィールドミュージアムにしていけたら素晴らしい効果が上がるでしょう。

この自然を何世代にもわたってつなげていくためには、市民の手でしっかり維持管理し、楽しみながら手を掛けていくことが必要でしょう。どうするかという計画づくりには子供も入れて、親と一緒になって考える。世代間共通の話題にして、みんなで携わっていくことが大切だと思いますよ」。

ありふれた河原が実は驚異のワンダーランド、「磨けば光るすごい力を秘めている」と専門家たちは言います。冬将軍の到来までまだ少し間があります。天気の良い日はあなたも、合流点へ行ってみませんか。素晴らしい発見があるはずです。

▲「合流点の自然を生かしたまちづくりを進めてほしい」と語るプロナチュラリストの佐々木洋さん

HOPE計画とは？

自然や伝統文化、産業などの地域特性を生かして、地域に根差した住まいづくり・まちづくりの促進を目的として、昭和五十八年、建設省によって制度化された事業。白根市では「川と風と実りのまち　広い空のまちづくり」を基本理念に平成七年に作成された。豊かな水と資源、風合戦に代表されるまちの歴史、農作物の収穫を象徴する実りをイメージしたまちづくりを全市的に進める。

推進委員会は市民と学識経験者の十八人で構成。現在は企画広報部会、新飯田プロジェクト部会、水辺プロジェクト部会に分かれ、具体的な事業の推進に当たっている。今回紹介した水辺プロジェクトのトンボ池はこの一つ。このほか新飯田プロジェクト部会では、新飯田の古い街並みを生かしたまちづくりを推進するため各地を視察。アイデアをまとめ、市長と共に対話集会「談（だん）・談・トーク」でまちづくりを話し合うなど、事業が進んでいる。

◀津川町を視察に回る新飯田プロジェクト部会の皆さん